

第3回 魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日 時：平成18年11月17日(金) 13:30～16:00

場 所：島根県職員会館 2F 多目的ホール

会長挨拶

井上会長

このところ教育を取り巻くいろいろな難しい課題が噴出している感があります。教育基本法の改正をはじめ、いじめの問題、いじめに関わる自殺という問題をどう学校が受けとめるかという大変難しい課題も突きつけられています。

あるいは高等学校における未履修の問題、これも大変難しい課題です。

先日、教育における不易と流行ということについて、話し合う機会があったのですが、教育というのは、基本は不易、変わらざるもの、むしろ必ず身につけなければならないこと。これを基本としながら、しかし、時代が新しい課題を次々と突きつけてきます。流行と言うと少し薄っぺらいですが、例えば経済、社会、文化のグローバル化ということを見無視して現代の教育のあり方を語ることはできません。したがって、不易と流行に良きバランスを持たなければならない非常に難しい時代であると思います。

例えば今回の教育基本法改正をめぐる議論の中にもあったわけですが、現行の教育基本法では個人の自由、個人の尊厳を基本にして書かれていますが、一方で公共政策、公共哲学ということが全国的に議論されております。ここでいう公共哲学の前提になるのは個人の自由と尊厳を守るため、あるいは発展させるために公共が必要になった。個人と公共は対立的な関係ではなく、個人の自由を大切にすれば当然他の人間の自由と尊厳を大切にしなければならない、そこに公共空間というのが生まれる、公共空間というのは、市民社会の規範であるという議論であります。今回の教育基本法改正の原案、議論はどちらを考えているのか、これもいろいろ考えなければならない課題に自分では思えます。

また、法律、制度というものと世の中で起こってる教育を取り巻く社会現象、課題というものとはどのような関係になってるのかということも考えてみると、現代はなかなか難しいところがあります。というのも私の大学のある学生が、少年非行やいじめの問題をテーマにした卒業研究を始めておりました。これが最初は学校の問題だろうと思って調べ始めてみると、実は必ずしもそうではないということがわかってきたようです。

例えばデイヴィッド・リースマンという社会学者は「孤独なる群衆」という著書の中で、

豊かな社会に到達した近代の人間は、むしろ非常に孤独で原子化し、砂のような社会になってしまう、あるいは、豊かな社会に到達した人々を、自分で考えるというのではなく、やたらと世の中の流行に合わせて外ばかり見て外に合わず、いわば“レーダー型人間”という類型が生まれてしまうということを述べています。また、カール・マンハイムは、そういう状況がドイツのナチズムを生む背景となったということを述べています。

つまり、豊かな社会に到達すればするほどむしろ社会の中に難しい諸問題が起こってきて、社会の構造が変わる。その背景には、家族というものはしっかりしたもの、あるいは地域のコミュニティはあるものだという前提で私どもも考えているわけですが、多くの社会学者は、その前提が崩れつつあると述べています。そのような社会の変化の中で起こるいじめとか人間の孤独とか犯罪。そういう位置づけで考えると、現代社会の一種の病理現象が学校にも現れていると理解する方が良いのではないかという見方を彼はしていました。

事の当否は別として、世の中で起こっているすべての問題を学校で対応できるのかというと、これは世界と日本の社会や経済の構造変動を教室の現場で受けとめるという、酷な側面があると思います。また、高校における未履修の問題も、日本社会にまだ根深い受験主義の一つの弊害がこういう形で現れていると思います。

ただ、ある意味で学校というのは大変な期待を世の中から集めているわけで、そういう難しい課題を教育の現場で解決してくれないかという、やや過剰かもしれませんが、そういう期待を持って見られているということも事実だろうと思います。

島根県に振り返ってみますと、私の大学では、県や企業のリーダーの方々、あるいはNPO団体の方々、いわゆる産公学民の共同で島根の長期的な未来をどのように考え、挑戦していくべきかというテーマで島根長期政策ビジョンフォーラムを開催しました。多くの方々に、25年後の島根をどのようにして持続可能な地域として再構築していくのかという議論を5つの分科会で展開していただきました。

どの分科会でも、いかに人を育み、活かしていくかという、広い意味での人材を育成するということが地域の生き残りにとって重要な課題であるかということに到達しました。これからの島根というのは、やはり人材育成ということの基本にしていくべきではないかという議論であったわけであります。

そういう点で今回のこの魅力と活力ある県立高校づくりというのは、生徒数が減少する中で、社会や経済の変化に適応しながら本質的に一人一人の生徒たち、あるいは人をどうやって育てていくのか、それにとって一番いいあり方は何だろうかということを考えてい

くという大変貴重な機会だろうと思います。

本日もぜひ活発な議論をお願いしたいと思います。

出席者確認

事務局

本日の出席者は、会議次第の2ページと3ページをご覧ください。

寺本委員、宮脇委員、吉迫委員が所用のため欠席。17名出席。

報告事項

三浦教育監

議事に入ります前に、県立高校の未履修問題についてご報告とお詫びを申し上げたいと思います。

学校の授業に関するルールは、学習指導要領で定められているわけですが、一定の教科、科目を一定の時間をかけて学習しなければならないことになっております。

このたび県立高校18校におきまして、そのルールに違反して受験に有利な教科、科目を少しでも多く学ばせようと時間割りを組んだために、必履修科目の授業時数不足や、一部の高校においては必履修科目を履修していなかったという問題が明らかになりました。

各高校は、様々な制約の中でやむにやまれぬ気持ちで進路保障のために取り組んでいたわけではあります。明らかに学習指導要領に反する行為であり、関係の生徒、保護者の皆様に対して受験前の大変重要な時期に心配をかけることになったこと、また、県民の皆様对本県教育に対する不信感を抱かせることになったことについて深くお詫びを申し上げます。

本件につきましては、島根県教育委員会にも重大な責任があり、11月2日の文部科学省の指針に基づき、11月7日には臨時校長会で対応策を明らかにしたところです。

2つありまして、1つは、補充授業の実施について生徒の負担を可能な限り軽減するとともに、卒業できるようにすること。2つ目は、大学等の受験や就職試験について支障が生じないようにすること、この2つについて各高校と連携し、総力を挙げて現在取り組んでいるところでございます。

今後、再発防止等について具体的な対応をとり、県民の皆様の信頼回復に努めてまいりたいと考えているところでございます。

お詫び申し上げますとともに、今後も御指導いただきたいと思っております。

議 事

議長

それでは、会議次第に沿って議事に入ります。

議題（１）について、今後の審議を進めるための論点整理をしたいと思います。

事務局から一括して説明をお願いいたします。

事務局

資料１「県立高校の学科・学級数並びに中学校卒業生数の推移」について説明します。

１ページ目は県全体の今後の中学校卒業生数について平成１７年から平成３０年までの数字を載せております。平成１７年、１８年については実数。平成１９年から平成２７年までは今年の５月１日現在の各学年の在籍者数。平成２８年から３０年までは、昨年の国勢調査の第１次基本集計結果の年齢別人口となっています。

中学校卒業生数は、現行の県立学校再編成基本計画の計画期間である平成１１年から平成２０年の１０年間では、２，５８８名、２６．５％の減少が見込まれます。一方、これから検討していただく平成２１年から平成３０年の１０年間では、１，１４１名、１５．７％減少すると見込まれます。減少幅が多少緩やかになりますが、中学校卒業生数は今後とも下げどまらない状況が続きます。

公立高校全日制課程の１校当たりの平均募集学級数は、既に募集定員を発表している平成１９年度で、分校を除き、平均４．３４学級となっています。

また、各都道府県の地理的状況等が異なるため一概に比較できませんが、平成１８年度の全国平均は５．４８学級となっています。

なお、学校数が平成１９年度と同数で推移すると仮定した場合、平成３０年度は平均３．６０学級と見込まれ、現行の県立学校再編成基本計画の適正規模を下回ると見込まれます。

２ページ目以降は、地域ごとの中学校卒業生数と公立高校の第１学年の学級数の資料です。

以下、地域ごとの状況と主な課題について、資料１のP.2からP.8までを説明

次に、資料２「高等学校の適正規模」について説明します。

以下、資料２を説明

事務局

次に、資料3「島根県公・私立高等学校の入学定員の設定に関する取り決め（概要）」について説明します。

島根県の公立・私立高校の入学定員の比率については、昭和44年に設置された島根県公・私立高等学校教育連絡協議会において決められており、現在のルールは、平成15年度に決められたものです。

以下、資料3を説明

事務局

次に、資料4「魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会における検討事項」について説明します。

資料4は、これまで説明しました資料1、資料2の事柄等も踏まえて検討委員会において今後検討をしていただく事項です。

以下、資料4を説明

議長

資料1の2ページ、安来・松江・八束地域について、意見ををお願いします。

委員

最初に聞いておきたいですが、この委員会のテーマである魅力と活力というのはどういうことなのかということと、いつこの魅力と活力について検討する予定なのか。

事務局

この委員会の名称が魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会ということで、ややもすると魅力と活力というところに関心、意識が向き、教育内容、教員の研修等に関心が集まりやすいというらいがありますが、資料4の検討事項からおわかりのように、県立高校の再編成に関する議論が中心となります。

さて、そうすると魅力と活力のあるという視点はどこで述べれば良いかということですが、再編成に関する議論を中心としながらも、やはり最終的には生徒にとって良い教育環境が確保されるべきですので、いろいろな場面でそういう視点で補足していただきたいと思います。

委員

過去の検討委員会には魅力とか活力という言葉はなかったと思うのですが、今回それが入ったということは、今までと違った何かがあるのではないかと思うのですが、それは何でしょうか。

事務局

先ほどお答えしたとおりであり、生徒数の一層の減少に対応した高校のあり方を中心として、学科のあり方であるとか生徒たちにとって魅力のある教育内容とは何かというような視点で議論していただきたいと考えています。

生徒数が減少する中で、どうすれば生徒にとって良い学校ができるのかというような視点でご意見をいただくとありがたいと思っております。

委員

ということは再編成がうまくいけば魅力も活力も自然に生まれると、そういうことです。それではこれから考え方を変えて。了解しました。

委員

先ほど来の発言を聞いておまして少し違うのではないかと思います。10年前に私が関わった検討委員会でもそうであったように、この検討委員会では、やはり魅力と活力ある学校づくりを中心に議論していく必要があり、そういう中で小さな学校にどんな魅力を持たせていくのかということが大切であると思います。

それから単に規模を縮小したり、統合する話ではなくて、10年前に再編成基本計画を検討したときの考え方を踏まえて、それに沿って今どうかという検証しながらやっていくべきではないかと思います。

それからもう1点、資料1の中学校卒業生数のシミュレーションは正しいのかどうか。といいますのは、県立高校の通学区域の見直しで、地域外入学枠の拡大や松江市内普通科の小学区への自由枠の導入などが検討されていると思いますが、それがどのようになるのかによって、他地域との出入が大きく変わってくると思います。それによってものの捉え方、考え方が全然違ってくると思います。通学区域の見直しについては、まだ結論が出てないとは思いますが、それによって、このシミュレーションがかなり変わってくるのかどうかということをお尋ねします。

委員

先ほどの教育監の話は、地域ごとに学校の再編成を中心というように捉えたのですが、この地域の決め方はどうなっているのか。松江・八束とか、例えば私が住んでおります邑智地域が大田・邑智ということになっており、その中で考えるというように捉えたのです。

しかし、邑智地域の場合、例えば総務事務所の関係になると浜田市と一緒に、消防の関係になると江津市と一緒に、そして土木関係とか福祉関係になると大田市と一緒にと、そのときの組み合わせの都合の良いところに、どちらかという中山間地域はそのときの割り振りの仕方ではどこかの都市部と地域的に一緒にされているというようなイメージがあります。

それからいくと同じ浜田教育事務所管内の地域が浜田・江津地域と大田・邑智地域の2つに分けてあるのはどういうことで分けてあるのか。というのが邑智地域といっても邑南地域はどちらかというと浜田の方が近く、通学可能なバス路線もあります。邑北地域になると確かに大田の方が近いとか。そこら辺りのことも考慮されてるのかどうかということをお聞きしたいと思います。それによって示されている生徒数のデータも変わってくるのではないかと思います。

事務局

資料1の他地域との出入りに関するデータは、現行の通学区域制度等を前提にしたものです。先ほどご指摘がありましたように、県立高校の通学区域のあり方については、7月に答申をいただいておりますが、それを踏まえまして現在検討しているところです。

通学区域をどのように設定するかによっては、生徒の流れが変わってくることも考えられますので、必要があれば、再度シミュレーションしたものをお示しすることも考えております。

また、地域設定について、ご指摘のとおり邑南地域と浜田地域との関係も承知しておりますし、大田・邑智地域の範囲に限定して考えるということではありませんので、ご理解いただきたい。

委員

もう一度確認させていただきたいんですけども、高校にとっての魅力とは何なのか、高校にとっての活力はどういうことなのか、それを具体的に説明していただけませんか。

事務局

魅力と活力というのは、子供の教育にとってプラスになる学校づくりとはどうかということですが、そういう視点で資料4の検討事項1から5までのことを中心に議論していただきたいと考えています。

第1回検討委員会で、いわゆる指導に関する話が非常に多かったように感じました。もちろんそういう話は困るということではありませんが、検討事項1から5までであることを中心に議論して、その過程で教員の指導や研修等についても補足的に話が出るのは良いのですが、そのことが中心になりますと肝心なことに及ばないということをお話ししたということです。

委員

そうしますと、最終的にこの検討委員会のまとめの中では、自信を持って、こういうことで魅力と活力ある県立高校づくりができるというまとめになるわけですね。

事務局

できるようにお願いしたいと思います。

委員

今日のこのデータを拝見して個人的な感想なんですけども、少子高齢化、特に少子化というデータが島根県にとって非常に厳しいものであるなということを改めて認識いたしました。この10年間で子供の数が26.5%減少し、この先10年で15.7%も減少するという本当にびっくりしております。

2ページ目の主な課題として安来市の場合、地元の高校に行くのではなくてどうも他へ行ってるというのは、県外なのか、あるいは他の地域なのか教えていただきたい。

それからもう一つ、この2ページの資料で見ますと県外に出ている数字が非常に多いということに、これも改めて驚いております。この中身も、例えばスポーツ推薦でスポーツの得意な子供たちが県外に出るのか、あるいはもっと勉強という面が出るのかというようなそのあたりがもしわかれば教えていただきたいと思います。

それで先ほどからこの委員会が魅力と活力ある高校づくりをということで、やはり単に地域ごとの子供の数に合わせた数字合わせの学校をつくるのではなくて、本当に魅力と活力のある学校にしなければ、このデータから見ますと何か県外に出る数字ですね、これは私の推測で終わればいいと思うのですけれども、ひょっとするとこのあたりがどんどん増えていくのではないかなと心配になりましたので、やはり魅力と活力あるというところをこの委員会で議論できる機会があればと思っております。

議長

私は、高校にとっての魅力とは何なのか、高校にとっての活力はどういうことなのかというような議論は並行してずっとやっていかなければならないことで、つまり答申を求められた諮問の中に、高校の再編成というハードの部分と魅力と活力ある高校のあり方、それを併記して、魅力と活力ある高校のためにも高校の再編のあり方について議論をしてもらいたいということで、これは表裏の関係、表から見た場合と裏から見た場合と、多分同じ議論だと思いますし、最終的なまとめのときには表裏あわせてまとめていくということであると思います。

先ほどからの議論はこれからも積み上げていくことにして、とりあえずは資料に沿って議論をしていただいて、さらにどこかの段階で一番重要なことに立ち返って議論していきたいと思っております。

事務局

先ほどご質問がありました安来市からどこに進学しているかということですが、安来市内の中学校卒業者の約20%が松江市内の公立高校へ、約10%が県外の高校へ進んでいます。ちなみに実数にしますと、5年間の平均値ですが、20%というと約80名、10%というと約40名になります。

また、県外進学者の志望動機については、残念ながら把握できておりません。

委員

第一学年の学級数について、平成20年度というのは通学区域の問題が入ってきてもそれほど大きな誤差は出てこないとは思いますが、通学区域や資料3の公私間の定員比率の問題等考えますと、10年後の平成30年度の学級数というのは単純に出てこないと思います。数字というのは一人歩きするきらいもあります。

平成30年度の学級数は予測値と書いてありますが、具体的にはどういう計算をされたのか教えていただきたい。

事務局

現行の通学区域や公私間の定員比率を前提として、平成19年度と平成30年度の中学校卒業生数の案分により算出したものです。

委員

現在でもいわゆる定員設定率が年々甘くなっている状況だと思いますが、それを基にした予測値であるとするれば、かなり過剰というか、そういう学級数を推計していることにならないかと思いますが、その点はどうでしょうか。

現行の公私間のルールでは、定員設定率を固定してあるわけではないですから、年々、定員設定率が甘くなっている状況ですよね。

事務局

現行のルールで年度ごとに計算していくとご指摘のようなことも考えられますが、お示ししている予測値は、平成19年度と平成30年度の中学校卒業生数の案分により算出したものですので、過剰な学級数とは考えておりません。

委員

よくわかりました。ただ、先ほど言いましたように平成20年度と平成30年度で同じ前提条件で算定した数字が先に出てしまうと、最終的には先ほどの活力と魅力と同様にどういう形で再編成するかというとき、じゃあどこまで学級数を見ていくかという目標値がまだすごくあいまいな状況の中で、具体的な数字がぼんと出てくると議論がぶれるのではないかと思うので、括弧付きの数字にして注釈を別につけていただくともう少し議論が弾

力的にできるのではないかと思います。

委員

こういう数字を出されるというのは大変だということはわかるのですが、これをベースにして話すわけですので、かなり正確な数字を出していただかないと議論の展開が難しいだろうと思います。

わかりやすく言いますと、先ほど言いましたように通学区域について教育委員会で検討されていると思いますが、地域外入学枠の拡大や松江市内に自由枠が導入されると、例えば、隠岐や安来からかなり松江へ流れると思います。見直し後の通学区域がいつごろ示されるのか、そして、どういう数字の変化と見ていくのかということだと思うのです。

ただ、我々は冒頭からこんな話ばかりしているべきではなく、もっと違う角度から話に入っていく、いろんなことがわかってからこの数字のことを話すべきで、きょうはデータとして見せていただいたということで、ぜひ魅力と活力ある学校とは何ぞやということを議論していただきたい。

委員

恐らく示されている数字はごく推定であって、平成30年度の状況というのを的確にとするのはなかなか難しいと思うので、先ほどからの話を聞いてどの地域も、松江地域も大体4クラスか5クラスぐらい減になると。出雲も同様ですね。

そういう状況の中で、私がこの会で話してほしいことは、例えば、県教委は平成12、3年ごろ、中高一貫教育を導入しました。邑智高校、飯南高校、吉賀高校で導入されたわけですが。これは決して悪いことではなく、いいことで、地域活性化という意味では大変な効果があったと思うのですが、中高一貫教育というものの真価ということでは、なかなか難しい問題もあると思います。そうすると今後、魅力と活力を出すために、新たに中高一貫教育を導入したらどうかとか、導入するとしたらどこなのかというような話し合いをしていただきたいと思います。

魅力と活力ということになると、そういう学校形態あるいは全県学区の総合学科の普通校をつくったらどうかとか、そういう話し合いが実は魅力と活力につながっていくんじゃないかと思います。

私はできるとしたら幾分生徒の減が少ない松江地域であろうと思います。ですから単にどこかの学級数を減らして終わりじゃなくて、これから10年先のことを考えると、松江市内のどこかの学校で、例えば附中と一緒に中高一貫教育を導入したらどうかとか、例えばの例なんです、そういうものを出すことによって松江地域の5学級減というもの

を逆に活力に変えていくというような話し合いがあっても良いのではないかと思います。

それは我々の中から出すのか、あるいは県教委が試案として出すのか、その辺はわからないですが、そういうような話し合いをしていただくとありがたいと思っております。

事務局

先ほど通学区域の問題についてご指摘があったわけですが、1年間に及びます検討を経まして、今年の7月に答申をいただきました。新たな通学区域は、できるだけ早くお示ししたいと考えておりますが、現時点で時期を申し上げる状況にないということをお答えしておきたいと思っております。

議長

通学区域もそうですが、今回の教育基本法改正が可決されますと、それに伴ってかなりの法令が変わってくる可能性もあって、それに伴ってひょっとしたら学習指導要領に影響が出るかもしれない。それに伴って教職員の配置の問題が出るかもしれない。こういう可変性のある変数がたくさんあるものですから、やっぱりこれは行ったり来たりしながら議論を積み上げていって、いつも両面にらんでおく。最終的には求められている答申にこぎつけるということです。

委員

松江市立女子高校というのはいつできて、どういう経緯でできたのか。また、この中で今の再編成の中にどういうふうに盛り込まれるのかということをお教えいただければと思います。

委員

女子高等学校ができましたのは昭和29年です。もともと市立の高等女学校でしたが、この市立の高等女学校は県立高女と、それから県立高女の同窓会が作った松操高等女学校と3つが松江中学と全部一緒になりまして、松江高等学校になったはずですが、ですから女子高校の方へよく市立高女の卒業生の皆さんが女子高が母校だと思っておいでになります。学籍は北高にございますのでと申し上げることがございます。

どうも当時は工業高校、商業高校、農林高校もすべて男性が主ですね。それで女性が行ける高等学校は松江高等学校しかなかった。もちろん松江家政高校や神竹家政高校等もありましたが、公立では松江高校しかなかった。

それで女子高、元の市立高女の卒業生の皆さんの思いやら、そういうものが一緒になって昭和29年に市立の高等学校をつくろうということになって、旧松江二中の中に併設できて、次は母衣町の商業高校の跡地、現在のラパンがあるところの方へ行って、昭和4

7年でしたか、現在の西尾町の皆美が丘へ移りました。

最初から4クラスで来ております。途中から4クラスのうちの一つが国際文化科になっております。1クラスの定員が45から40に変わることはあっても、女子高等学校だけが4クラスをずっと維持してきている。これが公私の比率のこと等もありますし、県立学校等との関連もありますから、そのクラス数がどうなるのかということ等も県教委と協議をしているというところです。

私どももこの会とあわせながら、果たして今、女子高等学校でいいのか、共学にすべきなのかとか、市として決めたわけではございませんけれども、いろいろ考えております。

検討の最初のころ、中高一貫校ということで女子の中学部をつくって、そして国際文化科の方へつないでという考えがあったようですが、小学校6年生が女子の中学校へ行って、そして国際文化科へ進める、それがキチンとできるだろうかとか、市の財政のこともあったりしまして、それは立ち消えたと聞いております。というようなことで女子高等学校といたしましてもいろいろなことがありますので、あり方検討ということで女子高校自体にも今考えさせておりますし、私たちの方でも考えていかなければならないと思っております。

委員

そうしますと確認ですが、女子高は公立ではあるが県立高校ではないので、今回の検討の外にあるものという認識でよろしいですか。

事務局

そのとおりです。

委員

皆さん、松江・八束地区、それから安来地区で今どこの学校に一番生徒が入ってきているとお思いですか。松江北高校通信制課程です。今春は331名入ってきております。しかも100名近くの生徒が中学校からそのまま来ています。全日制課程へ入った生徒も毎年5、6人ぐらいは通信に転籍します。こういうことを抜きにしてこの会の話は語れないと思っております。このことは全然資料に出てきませんが、大切な視点だと思います。松江・八束地区には松江工業の定時制課程があります。さらに宍道分校があります。

そういうことも含めて本当にどういう動きをしているのかということをしかととらまえながら、この地区はどうあるべきかとかいうことを考えていかなければならないと思っております。

委員

そのことに関連しまして、たしか平成22年4月に東部独立校ができると聞いておりますので、そうすると生徒の動向等が変わる。そういうことも考慮に入れておかないと、今のままの北高通信でもありませんし、南高の宍道分校でもありませんし、工業高校も普通科はそっちへ移るようですし、いろんなことがあると思います。

委員

安来・松江・八束地域というのは、県内でも特殊な地域ではないかと私は考えております。というのは北高、開星高などは県内のかなり幅広い範囲から進学してきている。そういうことを考えますと、この資料は7地域に分かれておりますけれども、やはりこの地域をまとめて議論をしていたままでは議論が深まらない点もあるのではないかと思います。これをばらばらにするようなことも一方では考えていかななくてはいけないのかなと思います。

議長

次に3ページの雲南・飯石・仁多地域についてお願いします。

委員

この雲南地域とか邑智も含めてですが、中山間地域というのは過疎地域で人口減少が非常に激しいところです。そういう中で産業、雇用、所得の問題をどうするかということで、定住化を図る努力もされているところですが、最近になって起こってきたのは、地方財政の悪化によって人口流出が出ていることです。夕張は典型的な例です。

そのように考えてみますと、この人口減少と学校の生徒数の減少は違うことかもしれませんが、地域はいかに個性化を図るか、または地域ブランドというのをどのようにつくっていくのかということで、そこの魅力をつくる観点から、そこにどういう行きたい学校があったらいいのか、そういう地域においてはどういう学校がその環境を生かした高校としてあり得るのか、その魅力のつくり方というのは地域が取り組んでいることから学んでみる必要もあるのではないかと思います。

人口減少は中山間地域だけではなく、松江市も同様で、アパートの空き室は1万戸に近くあります。そういうことから見ると、魅力と活力という問題は学校だけではなく、自分たちの社会の中でもコミュニティーの中でも同時に抱えてる問題であるということを共通認識として、非常に大事なことだと思っています。

委員

今のご意見に私も賛成です。私は邑智郡に住んでおりまして、典型的な中山間地域で、人口減少甚だしい地域ですが、私どもの町にある高等学校は普通科と農業科とが併設され

ている学校です。これはその地域のニーズですね、それから後継者のための人材育成も含めてその地域の人たちの期待が非常に大きいわけですね。

ですから雲南あたりにいたしましても横田あたりは農業を主体とした地域づくりをしている地域ですけれども、そういう地域の中でやはり地域が求めるものをどう高校教育の中に取り込んでいくのかということを考えていかないと、その学校自体に魅力を生み出すことはできないという思いがしています。

うちの町にある学校が普通高校であったら、多分生徒はもっともっと減ると思っております。もっともっと少なくなっているのではないかと思いますし、地域の思いも変わっているのではないかという気がして、そういう意味では中山間地域の併設校の一つのあり方みたいなものも論点の中に入れて考えた方が良く、先ほどのご意見を伺ってそんなふうに思いました。

委員

先ほど2人の委員さんが言われたことに私も同感です。前回の検討委員会で私も、高校生にとって活力があるとか魅力があるというのはどういうことなのか考えていますと言ったのですが、先ほどから皆さんの話を聞いて、やっと少しわかってきました。

資料の2の中で21世紀に向けた県立学校づくり検討委員会の中に書いてあるところで3学級以内の学校には運営上の問題点が指摘されているというところで、これを見たときにどういう問題点なのかなと思ったんですが、その下に何かちょっと答えが書いてあるなと思って、多様な生徒のニーズを踏まえた教育内容を充実することや生徒が集団の中で切磋琢磨しながら学校行事や部活動等を活発に行うことができる規模を考える必要があるということで再編成基本計画が出されたということなんですが、この文章の中に先ほど言われたような地域を取り込んだとか、それから適正な学級編制とか、そういうようなことが入っているのかなというのがわかりまして、私も最初は魅力と活力あるということばかりが頭にあったのですが。それにあわせて通信制課程に行ってる生徒がいるということもいろいろ踏み込んで考えるのがこの会なのではないかなと感じました。

委員

これは安来・松江・八束地区に限らないと思うのですが、先ほどの適正規模の話で3学級以下の場合の問題についてなんですが、7月でしたか、各学校を訪問したときに松江農林高校の取り組みの説明の中で、3学級にならないようにという取り組みをいろんな形でしているという説明がありました。

この再編成、確かに少子化なんですが、じゃあそれはもう今の学級数のマイナスしかな

いという発想だったら、それこそ魅力と活力なんか出てこないと思うのです。そういう中で、マイナスもあるかもしれないけど、プラスもあってもいいというような弾力的な考え方でいかないと本当に最低限のニーズを満たすこともできないというようなこともあると思うので、学級数というのは現状維持かマイナスしかないというふうに考えてしまったのでは議論が深まらないのではないかと思います。農林高校の取り組みを見せていただいて感じたところです。

委員

今のご意見のとおりだと思います。そういう意味で、例えばこの10年間で松江農林高校は総合学科へ変わったんですね。それから松江市立女子高校が中高一貫教育を導入されるという話もありました。つまり通学圏域には総合学科と中高一貫を各一つずつつくるという流れの中で前回の10年前があったわけです。

同じようにいえば、雲南地域では、三刀屋高校に総合学科が入ってきた。だからそれらをきちんと検証して本当にどうか、あるいは次にどういう施策をとればいいのかとかいうことが実は大きな問題ではないかと捉えておきまして、その辺の話を教育委員会の方から説明していただければ一つのイメージが湧いてくるのではないかという気もします。

そういう話もなしにどうかと言われてもイメージも何も湧かないわけです。この10年改革したことがどうなのかという話をしないと皆さんにご理解いただけないだろうと思って言ったわけです。

事務局

これまでの取り組み状況とその成果ということだと思いますが、そのことについても今後、検討委員会でご説明をしていきたいと考えております。

委員

小・中では少人数学級というようなことが課題になりますけど、高校では1クラス40人を少なくするというそういう発想というか、そういう考え方は今のところ全くないのでしょうか。

事務局

小・中学校で実施しているのは、いわゆる学級編制の段階で40人ではなくて35人とか30人とかそういうことだろうと思います。高校でもそういう話が出ておりますが、財政負担のこともあり、難しい課題であると認識しております。

ただし、実際の授業展開においては、特に英語でありますとか数学でありますとかでは、2クラスを例えば3グループに分けたりとか、1クラスを2グループに分けたりという形

での少人数の授業展開等はしてはおります。

〔休 憩〕

議長

再開します。

4ページから8ページまでまとめてご意見をお願いします。

委員

高等学校教育というものが人間の一生を見たときに人としての人間の発達の一つのプロセスの中の一つの時期ですよ、思春期という非常に多感な時期ではないかと思うんです。そこで何を育てるかということで魅力や活力ということが今出てるわけですが、その多感な、私はたまたま今幼児教育をやってますので、幼児教育の中できっちり育てなくてはいけないものがある。

小学校、中学校、高等学校というので、やっぱり人間の発達の段階によって必ず育てるべきことがあるはずだと思うんですね。そういう意味で高等学校教育の多感な15歳から18歳までの時期の中で本当に育てていかなければならない心の部分というものが、それはある意味で非常に地域との関わりというものが大きいと思うのです。その地域を抜きにして子供を育てるということとはあり得ないと思うのです。

そして今、例えば隠岐は過疎化して行って、島根県も過疎化して行ってけど、高校教育の充実と活力によって地域もきっと活力を持ってくるのではないかと、またそうしていかなければならないところに高校があるというように私は捉えたいと思います。

その高校教育を学力という面だけで見ると、先ほどご指摘があった、例えば隠岐の子供たちが本土の高校へ行きたがるということもあるけれども、また逆にその地域の中で育つ、そして思春期の中で親子が関わって育つ、親子と地域が関わっていくという、思春期の大切な、ある種最後の段階ですよ、大学行ったらどうしたって出ていきますから、その最終段階の親子の関わりというものも非常に重要だと思うんですね。やっぱり親元で育てなくてはならないし、育つものにも目を向けていただきたいし、それをすごく大事にしなければ高校生活はないのではないかと思うんです。

家庭教育の最後の仕上げみたいな時期ではないかと思うんですね。そういう面からもぜひ捉えていきたいし、高校生の心や学力も含めて地域の中だからこそ育つ、そしてそれがまた地域の活力になって、地域に対する人間の思いというものもそこで育って、それが例えば大学行ってもまた帰って、例えば私の場合、隠岐ですけど、隠岐の何かをやっていこうとか、地域で何か自分の力を発揮しようというものにもつながると思うので、学力だ

けで見えてはいけないと思ひまして、ぜひそういうことも加味しながらこの検討をしていけたらなと願っています。

委員

私も3学級以内の学校には運営上の問題点が指摘されるということは、隠岐の高校はすべてどこか欠陥があるのではないかと指摘されているというような思いも感じたりするのですけれども、隠岐高校と隠岐水産高校には視察に来ていただきましたが、小さいけれども、一生懸命魅力を持たせて頑張っている先生、熱い思いを持った先生方の気持ちとか、それから、先ほど言われたように地域の中でということをとっても大事にしたいなと思っています。

この会の議論は高校再編成ということが中心だとおっしゃったんですけども、第1回検討委員会のときに魅力と活力ある県立高校づくりというタイトルにしたということの大切さを私たちはもう一回確認し合っていく必要があると思います。高校再編成検討委員会じゃなくて魅力と活力ある県立高校づくりということにしたことの意味ですよ。

もし、表は魅力と活力ある県立高校づくり、でも裏では数合わせで、そういうことではやっぱりおかしい、いけないと思います。

どうしても現実的にいけば、ネガティブな話になってくると思うのですが、皆さんがおっしゃっているように前向きに地域に根差した高校とはどういうことなのかということ話し合っていくことが、小さいけれども魅力のある高校はあるんだよということを示すことになると思っています。

今、海運業というのはすごく盛り上がっています。中国の関係だと思うのですが、日本海側だけではなくて、神戸の方の大きな会社の方が隠岐水産高校の生徒が欲しいと言われて隠岐水産高校の校長先生を訪ねてこられたと。ヨーロッパとかそういうところにも向けた仕事をしているところだと聞いたのですが、隠岐水産高校で鍛えた生徒たちというような話も聞きましたので、そういう意味でも自信を持って取り組んでいきたいと思っています。

委員

今日の資料はあくまでもなくす、減らすという方向の資料で、資料5には、20年度の最終答申のところまで各回の項目が書かれておりまして、これに従って進めていかなければならないというのも十分承知しておりますが、今まで皆さんのご意見の中でも出てまいりました、減らす、なくすというだけではなくて、このうちの1回の半分の時間でも今の数を維持するためには、あるいは増やしていくためにはといったような時間がとれないものかと考えます。

一つには、私たちは高校生、高校1年生、2年生、3年生の話をしてきてるわけですが、高校生の定義というのを私は15歳、16、17、18という年代だけと捉えておりません。6・3・3で12年の間の年齢というのは決まっているんでしょうけれども、現実的にはもう99%がこの年齢のお子さんだとは思いますが、本当にそこだけで論議するということは、履修の問題で今非常に心を痛めていらっしゃると思いますが、大学へ、できるだけいいところへ進学させるための前の3年間とともとられかねないような論議の仕方になるのではないかと考えています。

それから特に松江・安来方面の子供さんで米子等に、県外に流出しているという話がありました。島根県に外から来ている子がどれだけいるのだろうか。例えば道州制が進んでいくこれからのことを考えても島根県という枠でだけ考えていくのかといったところとか、それから県外からも魅力があれば島根県の高校に来たいというぐらい魅力のあるものをつくっていくというような考え方もあるのではないかなと考えております。

ですから少しでも、減らす、なくすという方向だけではなくて、イコールからプラス、そういったところの論議についても話をしていくことができればいいと感じているところです。

委員

先ほどの隠岐に関するご意見まことにごもつともです。私も隠岐に勤めておりまして、島前から子供を出さないようにがんばったつもりですが、現実に志向としてそういうものがあるという話をしたわけですし、要は10年前に県教育委員会が出した再編成基本計画では、3学級以内の学校には運営上の問題はあるが、しかしそれらの小規模の学校が地域文化の拠点であるといったような大きなところを踏まえて残すように努力していかなくやならん、これがもう最大のポイントだったんです。

資料では、例えば佐田分校を後期計画に従ってと書いてあります。これは佐田分校の生徒がいなくなれば、ルール上の数字がいなくなればそれを検討するわけで、資料ではいかにも募集停止をする、こんな表現ですよ。佐田分校は今、須佐太鼓で活気づいていて、地域に根差した学校なんです。私は大社高校にいましたもので、ものすごく愛すべき子供たちなんです。まだ生徒がいるんですよ。いるときにこんなことを書かれると、もういつなくすのかと、こんなことになってしまって、資料の数字から見てそういうことにならざるを得ないというのは私もわかりますが...

他県ではほんととまとめてしまうところもあります、でも島根はそうしないというのが10年前です、少しでも残していこうと、可能な限り残して頑張ろうというのが島根の姿

勢だったんです。やっぱりそういう考え方をベースにして、いざというときはしょうがないということはあったとしても、どうすれば残るのか、その地域の特性に合った高校づくりをどのようにしていくのかということをお考えいただきたいということを島根県公立高等学校長協会の会長としてぜひお願いしたいと思っています。

委員

まず中山間地、隠岐等のいわゆる小規模校を、今後どのような魅力を出して、どのようにしたらいいかというようなことが、多少地域に違いがあっても一つのテーマではないかなと思います。

それからもう一つは、都市部あたりの高校のいわゆる魅力ある学校づくりはどのようにするかという、大体2つの大きな論点があって、それを絞っていくとおよそ見えてくるのではないかなというような気がするわけです。次回からそういう議論をしてみたいと思います。

委員

隠岐を含めて中山間地域の県立高校のあり方として、質的に魅力とか活力ある学校にしなければいけないということも一つですが、やっぱりある程度の規模が必要だという点があると思います。

資料にもあるように少子化の中であれば、現状維持を何とか、少子化だけれどもそういう地域の火を消さないためにというような考え方だとなかなか魅力や活力が出ないと思います。逆に、そういう地域で、じゃあ8学級にするというのは、現実的ではないと思います。

今、仮に2学級とか3学級であっても最低限4学級ぐらいに持っていくというような視点でないと魅力と活力というのは出てこない。ハード面でも、あるいはそこに関わるスタッフ面でも出てこないと思います。

中山間地域については地域の拠点という、例えばアメリカであれば大学が田舎に行ってもそこそこありますから、それがその地域の拠点でしょうけれども、日本あるいは島根県の現状からいったら高等学校というのはその地域の拠点という意味では欠くことのできない存在だと思います。

都市部もですけど、特に隠岐を含めた中山間地域についてはそういう魅力と活力をいかにつくっていくかということをお考えいただきたいことをこの会で議論ができればと思います。

委員

この数字の上でどうするかということで、これは現実的な問題として捉えていかなければ

ばいけない問題であると思います。

今の学校教育の問題、皆さん方触れないようにしてる部分というのはたくさんあって、毎日のようにテレビで報道されている部分があるわけですが、そういう中であって、島根県の自然環境とか社会的な環境だとか、あるいは地域教育力がまだ残っている地域、そういうものを魅力にして、先ほど県外からここを求めてくるという話もありましたけれども、子供の成長過程においてすばらしい環境を得ることができるというような地域をどのようにつくっていくかということも一つの魅力になるのかなというように思っています。

現実的な話ではないかもしれませんが、今の時代にこそ、そういうところを利用した新しい方法論が出てくることはないのか。過疎化や少子・高齢化という問題を優れた人を育てる環境という視点で再評価をしていったときに、何かあそこの学校へという魅力ができないかなというようにも思っていて、論議がそういう点にも及んでいけばいいな思っています。

委員

先日、江津工業高校のOBの方たちが中心になって江津市を再生しようという会合をしていらっやいました。その中で江津工業の生徒たちにもっともっと力を与えて、江津工業の生徒が何か1番にでもなれるような取り組みをしてくれたら企業が江津にやってくるのではないだろうか。あそこの高校の卒業生はすごいぞというようなことになれば人口も多くなるだろうし、質も高まってくるのではないだろうか。

そういう取り組みをしていらっやる会合に参加をしたのですが、まさに地域との関わりということではとても良い取り組みだと思いました。それは一つの高校の例ではありませんけれども、その高校の質を上げることによって他の学校がどんどん活性化してきたり、それから地域の皆さんの元気の素になったりすればとっても良いなと思いましたので、皆さんに紹介したいと思いました。

委員

皆さんがおっしゃってるのを聞いてますと、やっぱり魅力と活力の議論を抜きにしては話が進まないなという感じを受けております。

実際うちの子供も今中学校3年生で、高校進学控えております。私立の高校からも、ぜひあなたと面談をしたいというような、何か文書が来たりしているようです。スポーツが得意な人とか何かに秀でているというような、県で何位に入ったというような人にもそういうのが来たりしているようですけれども、うちの子供やその友人、地元の中学校の中学生に聞いてみますと、大半は地元の関係で、中山間の小学校、中学校出てますから、いい

大学にとかいう、親には思いがあっても、生徒自体にはそこまでの意欲があまり見えてないような気がします。

やっぱり地元の近いところ、それも今何になりたいのがはっきりしてない人はとりあえず普通科に行こうかと、そうじゃない生徒は、例えば家が大工さんだから建築の勉強がしたい人は江津工業の建築に行こうとか、そういうことなんです。

うちの子供にも、この会で学校視察した際の資料も含めていろいろ見せたりするのですが、島根には行きたい魅力のある学校がないという結論が今のところ出ております。これ中学生が下した結論です。これはうちの子供だけではなくて、うちの中学校の中にもかなりおります。だけど経済的な問題とかで親がとりあえず地元に行けとか、そういうのがあったりして、子供の意にそぐわなく仕方なしにその高校に入っているというようなことも実際の現状にはあると思います。

私が住む地域では県境を越えたすぐ隣に、有名人、カーブの選手とか、音楽の分野で有名な人とかが卒業した私立高校があります。そちらの方にどうしても行きたいとか、また親がそういうところ出ている人が多いものですから、そっちの方に勧めたりということもあります。

そういうところから見ると、親の意見も入るのですが、やっぱり子供自身が子供同士でどこ行こうかという話はいつもしていると思います。先生の指導も受けながら、島根のこういう高校に行きたいなという、やはり魅力、子供たちはクラスの数が多いからその学校に行きたいとか、少ないから行きたいというのは、あまりないと思います。多分そういうことではなくて、友達が行くから、あるいは、例えば官僚を目指そうとしている子供だったら、いい大学に入らないとなれないと思って、そういうところを目指す子もいるかもしれません。

島根県内にある高校の中でこの高校に行けば自分の先の道が目指せる、その地域限定ではなくて、益田のこの高校に行けばできる、隠岐のこの高校に行けば叶えられるというような各校の特色、魅力の部分を考えて、それを踏まえた上で再編成を考えていくことが必要ではないかと考えます。

委員

資料3に公立と私立の高等学校の比率がありますが、私学の17%が、例えば20%になるということもあり得るんですか。私学とのバランスというものもとても大きいと感じましたので。

事務局

平成21年度以降の公私比率については、今後審議をすることになっておりますので、現時点でどのような比率になるのかわかりません。

委員

今は全体で83対17ですけど、これは全国から見たら極めて公立のウエートが高い比率です。私学の立場からいうと、少なくとも全国並みにしてほしいということは言えますけれども、県立高校は平成11年度の再編成計画があり、それをベースに進めているので、それは譲れませんというのが今までの主張でした。平成21年度からのことについては、この検討委員会と並行して議論させてくださいということを私学としてお願いしてるところです。

委員

ちなみに全国は何%ですか。

委員

全国の私立の比率は約3割です。

議長

議題(2)今後の進め方について事務局から説明してください。

事務局

資料5の検討スケジュールについて説明します。

本日は第3回検討委員会ですが、第4回以降の検討委員会については、2カ月に1回ぐらいのペースで開催したいと考えております。その間に専門部会も開催したいと考えております。

検討内容は、資料4で説明しました項目を載せておりますが、いろいろご意見もいただいておりますので、検討内容については今後も修正を加えていながら進めたいと考えております。

なお、日程的にはこのような日程で進めていきたいと考えております。約1年先には中間まとめを行い、その後、県民の皆さんからの意見も聴取して最終答申の取りまとめというスケジュールで考えております。

議長

何か質問がありましたなお願いします。

委員

要望ですが、こうやって今日のいろんな議論もあって、せっかく議論したら、やはりそれが生かされなければいけないと思います。そのためにはすばらしいプランをつくっても、

やはり財政的な裏づけがなければできないことだと思います。

先ほど40人学級を30人なり35人にする計画がありますかという質問に対して財政的にというお話もありました。じゃあ財政的にというと具体的にどういうことになるのか。

それから再編成とか統合する場合、例えば益田翔陽高校は本年度スタートしたわけですが、そうやって2校を1校にするとしたら、それにはどれだけの財政的な支出が伴うのかというようなことも検討しながら進めればと思うので、そういう資料も提供していただければと思います。

議長

他に何かなければ、事務局からその他何かありますか。

事務局

次回、第4回目の日程ですが、今のところ1月19日金曜日の13時半から16時というところで考えております。ご都合は後日確認させていただきますが、そのようにご承知おきいただきたいと思います。

議長

それでは、以上で本日の議事を終え、進行を事務局の方に返します。

閉会挨拶（三浦教育監）

2時間半の長時間にわたりまして非常に内容の濃い議論をいただきまして、まことにありがとうございます。

20名の委員の皆様、いろいろな立場の方を委員としてお願いしているわけでございます。それは多様な立場から様々な意見が出て内容を深めていただきたいということでございます。そういう意味で今日は非常に内容が深まり、いよいよ次回から個別の話に入っていくわけでございますけども、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

なお、資料等要望がございましたら、こちらの方で用意させていただきますので、どうぞよろしくお願ひします。今日はまことにありがとうございました。

閉 会

事務局

では以上をもちまして閉会いたします。ありがとうございました。